

11月23日(土) 広島県社会福祉会館にて「社会福祉実践の原点」と題して講演会を開催し46名の参加がありました。講師には日本社会福祉士会の初代副会長として組織の基礎をつくられた秋山智久氏(以降、秋山先生)をお招きしました。秋山先生は日本社会福祉士会の設立宣言やロゴマークを作成に携わられました。著書に『社会福祉実践論』、『社会福祉専門職の研究』、『社会福祉の思想入門』等々があり、現在、広島県社会福祉士会の広報紙でも連載記事をお願いしています。



講演会では、ソーシャルワーカーの最大の武器である「人間としての豊かさ」について約2時間お話しいただきました。

第1部では「我々は何を感じるのか」(ソーシャルワーカーの感性)のテーマで話されました。ソーシャルワーク実践の対象は「不幸」「苦悩」であり、そこから目を逸らしてはいけない。目の前にいるクライアントの不幸や苦悩を感じ取る事が大切である。その為には、自然に触れ、芸術・文学に出会うなど感受性を育てる事が必要である。感受性は目の前の人や物が育ててくれると伺いました。辛いという字に何を一本(「一」)加えたら幸せになるのか。その一本に、それぞれのニードがある。

第2部では「我々はどう働くのか」(ソーシャルワーカーの専門と労働)のテーマで話されました。「あなたは大切な人ですよ」と心から伝える。かつてソーシャルワーカーは相談援助の優位な所へ位置していた為、パターンリズム(学歴、資格、知識を持って上から社会的に弱い立場にいるクライアントに接して来た)の傾向が強かった。その為、クライアントや他の専門職からも距離を置かれていた歴史がある。最近では、当事者主権の視点から人間としての尊厳と平等の視点でワーカーとクライアントは対等に向き合う存在であると考えられるようになってきた。秋山先生は、日本社会福祉士会の設立宣言を携えいくつかのキーワードを使いソーシャルワーク実践の意義について説明されました。『寄り添う』、『共にある』、『立ち尽くす実践』、『見えること、できること』の4つのキーワードがそれである。ワーカーは時間的制約やローテーションにより、向き合っている仕事を途中で中断せざるを得なかったり、クライアントの持つ人生の重荷に耐え切れずに、「逃げ出したい」想いに駆られることがある(マザーテレサはこのことに対して「我々はソーシャルワーカーになってはいけません」と断言、生活のため、自分のため、家族のためではダメと添えられました)。進むに進めず、その責任を放棄してしまう事もできない姿を秋山先生は「宙ぶらりんの援助」と表現し、ワーカーは「弱さ」を持った存在であると指摘。実践の中で「逃げだす」かもしれない弱いワーカーが自分の弱さを見つめ、痛みや苦痛に苦しむクライアントと共にあろうとする道筋を歩み続けていく事が『共にある』、『寄り添う』ことである。『立ち尽くす実践』は、クライアントの過酷な人生にぶつかり援助しようにも何もできない状況の中でも、クライアントと共に苦しむ事である。ソーシャルワーカーは原因が『見えても何もできない』状況に出食わず事もある。たかが、ソーシャルワーカーが人生の苦悩の全てを

解決できるわけではない。ただ、少しだけその重荷を軽くする手助けをする事はできる。人生の仕事として「援助」専門職を選んだのに、その援助ができない状況に立たされることがしばしばある事を知る覚悟が必要である。何もできないかもしれないが、「一緒に参りましょう」という姿勢を示す覚悟ができなければいけない。これが、「立ち尽くす」けど、「逃げ出さない」ようにしようという覚悟であると伺いました。

第3部では、「我々はいかに生きるのか」（専門職としての生き方）というテーマで話されました。援助者の根本とは、「立ち尽くす実践」である。「援助」者として、働きかけても援助しても、或いは何も変わらないかもしれない。多くは徒労に終わるでしょう。ワーカーの想像力を越えた、感受性を遥かに越えた、過酷な現実が人生にはある。この時に、「よく解ります、大変でしたね」と言うのは、いつわりである。相手の経験した人生の重みとうめきの前に、その痛みを想って、ただ、“立ち尽くす”ことしか出来ない。福祉援助者は、“何もできない、しかし、ただわずかなりとも理解したいと願うだけ“(立ち尽くす実践、何もしない実践)、それでいて根本から「人」を支える実践というものがきっとある、その立ち尽くすことこそが「援助」の究極の姿ではないかと教わりました。

ヒューマン・サービス実践を豊かにするものは①出会い②経験③クライアント④愛であり、これらすべて、出会ったものへの感謝が大切であると話され、さだまさしの「秋桜（コスモス）」第2番の一節（※）をうたいながら講演を締めくくられました。

※「ありがたい言葉を噛みしめながら、生きてみます、私なりに」